

アイソタイプからピクトグラムへ(1925-1976) :
オットー・ノイラートのアイソタイプとルドルフ・
モドレイによる図記号標準化への影響に関する研究

伊原, 久裕

<https://doi.org/10.15017/1470650>

出版情報 : Kyushu University, 2014, 博士 (芸術工学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : Fulltext available.



氏 名 : 伊原 久裕

論 文 名 : アイソタイプからピクトグラムへ (1925-1976)
—オットー・ノイラートのアイソタイプとルドルフ・モドレイによる図
記号標準化への影響に関する研究—

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1925年から45年までのアイソタイプの展開と1960年代に興隆した図記号標準化におけるその影響について考察したものである。アイソタイプの展開と影響とを結びつける存在として、本論文では特にアイソタイプに影響を受けつつも独自の活動を行ったルドルフ・モドレイに注目した。本論は9章から構成されており、第1章から第6章までは、ウィーン社会経済博物館からイギリスのアイソタイプ研究所での活動に至るまでの間のアイソタイプの展開の過程を、特にその普及の側面に焦点を当てて論じた。第7章から第9章では1930年代から1976年までのモドレイの活動を追跡し、彼の活動に焦点を当てることで図記号標準化の動向におけるアイソタイプの影響について検証を行った。また日本におけるアイソタイプの影響についても合わせて考察を加えた。

第1章では、1925年1月から1928年までのウィーン社会経済博物館の活動を俯瞰した。当初の博物館構想と博物館の展示構成を分析し、展示空間にも当初の構想の特徴が部分的に反映されていたこと、ならびにアイソタイプの表現形式の発展の過程をあきらかにした。次にアイソタイプの標準化が達成される契機となったアトラス『社会と経済』の分析を、第2章で行った。外部クライアントから依頼を受けて制作されたアトラスでは、世界史的視野からの社会的経済的事象の視覚化が本格的に試みられ、表現面でもシンボルのみならず色彩、地図、フォーマット、書体といった個々の表現要素の全体にわたる標準化が追求された。またこの事業の半ばにポール・オトレの「普遍文化アトラス」構想へ参画し、アトラスはその後のアイソタイプの理想的メディアとなる百科事典として位置づけられる重要な作品であった。

第3章では、体系としてほぼ完成したアイソタイプをノイラートがどのように国際的に普及させようとしたのかについて、《新時代》展構想ならびにCIAM第4回国際会議へのノイラートの関与を取り上げて論じた。ノイラートは一貫してアイソタイプの作業プロセスの核である「トランスフォーメーション」の専門性を強調しており、こうしたノイラートの基本姿勢がアイソタイプの質を保証する一方で、その拡がりを限定する要因ともなっていたことを指摘した。第4章では、普及をめぐる同様の問題をさらにアメリカへのアイソタイプの進出を題材として検証し、特にルドルフ・モドレイとノイラートとの意見の対比を中心に論じた。ウィーン社会経済博物館での経験を有していたモドレイはアメリカで独自の活動を始め、ノイラートとは異なる意見を持つようになる。本章では、アイソタイプと同等の事業を始めたモドレイが、共同作業によるシンボルの標準化という課題に注目していたことを指摘し、それが戦後の彼の活動の出発点を形作ったことをあきらかにした。

第5章では、オランダとイギリスにおけるアイソタイプの新しい試みとして1936年に出版された『国際図像言語』、アイソタイプ・アニメーションと歴史絵本の制作を取り上げて論じ、アイソタ

イブの活動の一貫性を確認した。

第6章では、それまでの考察を踏まえ、アイソタイプを、表現形式の特徴、制作の特徴、供給の特徴の三つの観点から体系的に論じ、独自の表現体系であることをあきらかにした。

第7章では、日本におけるアイソタイプの受容の様相を取り上げ、日本では他国とは異なり、戦前には図像統計の流行があった形跡はほとんどなく、戦後になって戦後民主主義の高まりを背景に主として教育領域でアイソタイプが注目され始めた経緯を論じた。

第8章では、モドレイの戦後の活動に着目し、彼が関わった一連のシンボル辞典プロジェクトを追跡し、図記号の標準化を目的としたほぼ同じ内容の計画に断続的ではあるが継続して取り組んでいたことを示した。

第9章では、1966年に設立されたグリフス社でのモドレイの活動と60年代以降の日本のグラフィックデザインにおけるアイソタイプの影響を平行して考察した。まず1960年代初頭の日本ではピクトグラムへの関心が急速に高まり、勝見勝や指導的デザイナーによってアイソタイプが紹介され始め、アイソタイプがピクトグラムの理念的かつ理論的参照対象となっていたことを示した。次に、グリフス社でのモドレイの活動を追跡し、モドレイの戦後の活動はアイソタイプの影響を批判的に継承し、ノイラートが実行することのなかった図記号の標準化とその国際的普及という目標の実現に向けての努力の軌跡と見なす解釈を提示した。またモドレイは勝見の協力を得て勝見の編集する雑誌『グラフィックデザイン』において、図記号標準化のための広報活動を推進するとともに、アイソタイプの紹介も積極的に行っていたことを示した。以上のように、本章では、図記号標準化の動向において、ルドルフ・モドレイの活動と日本のグラフィック・デザインの活動のうちにアイソタイプの影響が見いだせることをあきらかにした。

本研究は、以上のようにアイソタイプの成立からその影響に至るまでの過程を実証的に追跡し、アイソタイプの成立過程、その体系としての独自性をあきらかにした。特にこれまで取り上げられることのなかったルドルフ・モドレイの活動に着目することで、図記号標準化の動向とアイソタイプの関連を明確にした点が、本研究の基本的な意義である。